

「第7回 松山大学図書館書評賞」



Contents

● 第7回松山大学図書館書評賞

表彰式	P2
審査委員による全体講評	P3
作品紹介・講評	
最優秀書評賞	P4
優秀書評賞	P5
佳 作	P6~8

● 図書館News

● 私が薦めるこの一冊

人文学部 英語英米文学科 教 授 穴田 浩一	P10
人文学部 英語英米文学科 准教授 赤羽 仁志	P11

● 統計データで見る松山大学図書館

P12

「第7回松山大学図書館書評賞」 表彰式

第7回松山大学書評賞の受賞者を2007（平成19）年12月14日に発表し、表彰式を2008（平成20）年1月18日に行いました。受賞者は以下の通りです。



最優秀書評賞（1名）

吉田 達哉（人文学部社会学科4年）

『下流志向 ―学ばない子どもたち働かない若者たち―』内田樹著、講談社

優秀書評賞（1名）

田中 麻美（人文学部社会学科3年）

『イギリスのいい子 日本のいい子 ―自己主張とがまんの教育学―』佐藤淑子著、中央公論新社

佳作（5名）

合田 佳奈（人文学部社会学科2年）『人は見た目が9割』竹内一郎著、新潮社

高木 政利（人文学部社会学科3年）『日本の若者の弱点』中里至正・松井洋著、毎日新聞社

立町 祐作（人文学部社会学科3年）『安心のファシズム ―支配されたがる人びと―』斎藤貴男著、岩波書店

向井 梨菜（人文学部社会学科1年）『最後に咲く花』片山恭一著、小学館

森 友樹（経営学部経営学科4年）『強く生きるために』美輪明宏著、主婦と生活社

注）受賞時の学年です。



「第7回松山大学図書館書評賞」審査委員による全体講評

— 話し言葉、書き言葉、そして日本語 —

審査委員代表 経済学部教授 大浜 博

今年度第7回図書館書評賞への応募作品は36点でした。前回は22点と若干低調だったので、今回は幾分挽回したことになります。ただ、感想文に近いものもあり、書評の域に達している作品は必ずしも多くありませんでした。

しかしここでは感想文と書評の違いは何かという点ではなく、それよりも気にかかった文章作成上の問題点に話を絞ります。それは、いわゆる「文のねじれ」です。例えば、主語と述語がうまく結ばれていないような場合です。従来、この文のねじれは作文技術上の巧拙の問題として扱われるのが一般的でしたが、最近ではいわゆるプロの物書きと目される人たちの文章の中にも散見されます。これはもちろん文章の巧拙の問題でもあるでしょうが、それに加えて日本語の文章表現自体にある種の変化が生じつつあるようにも思われるのです。

日常の会話では、一つの文が完結しないうちに別の文に乗り換えたり、言葉上は明示されていない話題について叙述をしたり、言いかけた文を中断したりなどの簡略表現が可能です。そのことによって意志疎通に支障をきたすことはあまりないからです。これは言葉外のさまざまな状況が意味を補完してくれるからであって、現場を共有する人たちの間でのみ有効なコミュニケーションといえます。

学生諸君の文章に「ねじれ」が頻発するのは、現代日本語の文章体が、今までにない規模で口語体の浸食を受けつつあることの一つの現れではないでしょうか。たとえば、メールでの口語表現、絵文字、間投詞、擬声語・擬態語などの頻用に見られるような、現場密着型の表現手段への依存傾向が、今の若い人たちの文章に大きく影響しているのではないかと思います。

言語記号はそもそも抽象的で概念的であるからこそ不特定多数の相手とのコミュニケーションの手段足り得るのですが、今やそれを具体的、感覚的に使おうとする姿勢が顕著になりつつあるようです。世界と瞬時につながるインターネット時代になったにもかかわらず、言語コミュニケーションがかえってその射程を縮めるというのは余りに皮肉なことです。

日本語は、ただでさえ主体を表現しなかったり、自発表現を好む傾向があり、事態の因果関係を明確に浮かび上がらせることには余り熱心な言語ではないことを自覚する必要があります。主体を状況に埋没させることなく、客観的な対象分析の視点を持つためには、話し言葉に流されない、しっかりした文章表現力を養う必要があることを理解してもらいたいと思います。そして来年度は、今回に勝る多数の力作が寄せられることを期待してやみません。

「第7回松山大学図書館書評賞」 作品紹介・講評

○最優秀書評賞作品

吉田 達哉（人文学部社会学科4年）

下流志向

—学ばない子どもたち働かない若者たち—

〔請求記号：367.6/Uc〕

著者：内田樹 出版社：講談社

出版年：2007



学力低下が問題になっている。「いまの子どもたちは、勉強する意欲が無くなった」と、大人はみんな言う。

しかし、実はその逆だとしたら、どうだろう。いわば、「学力が上がらないように、みんな必死」なのだとしたら。著者は、このような常識と全く正反対の仮説を立ててみせる。

つまり、子ども（とその親）たちは、みんなの競争力が低下し、結果として自分が「それほど平均より低くない」状態に安住しようとしているのではないか、というのだ。

そのせいか、子どもたちは分からないことや知らないことへの抵抗が極端に少ない。調べて疑問を解決するどころか、むしろそれをあたかも存在しないもののよう、無視してしまう。まるで「みんなも知らないことを、自分が知っている必要はない」と言わんばかりに。

また、著者が言うには、いまの子どもたちは学校という場を、「つまらない授業を我慢して聞いてやる苦役」と「それを我慢した分だけの、自分たちの権利（わがまま）」との等価交換をする場だと考えているらしい。

だから、子どもたちは傲慢に振る舞う。教師の話を真面目に聞く気など、自分には無いのだということを全身でアピールする。そのさまは、「全力でだらしない態度をとっている」ともいえよう。彼らは敢えてそうしている。それどころか、真剣に授業を聞くということは、教師に屈服し、力関係において「負けた」ことになる、それは損だとさえ思っているというのである。

その原因は「消費者化」にあるのではないかと著者は言う。昔は自営業が多く、実家の仕事を手伝うという「労働者」としての自己形成がまずあったが、現代のサラリーマン家庭にはそれが無い。むしろ、商品を買う側、サービス受益者という立場での自己認識を、いまの子どもは先に身につける。教師と生徒は、あくまで対等だと思っているのである。

「それを知って、何かの役に立つんですか？」という子どもたちの問いの前に、大人は何も言えない。学校を等価交換の場と考える限りでは、子どもたちにとってこの質問は無敵の切り札なのである。彼らの自尊心は、これで傷付かずに済むのだから。それどころか、わざわざ学校へ来て勉強しなければならないことを拒絶する、免罪符にすらなりうるのだから。

こうして、子どもたちは十分な学力も自律性も身につかぬまま、しかし自己評価だけはやけに高い「子どものままの大人」になってしまう。市場原理的な損得勘定の思考で、子どもたちはその「損する」ほうの生き方を、皮肉にも自ら選択してしまっているのだ。

ひょっとしたら、若い読者の中には「図星だ」と、どきっとしてしまう人もいるのではないだろうか。自らも大学で教壇に立つ著者の分析は、深い洞察と知見に溢れている。

○講評 人文学部教授 大内 裕和

一読してすぐに「うまい」と唸ってしまう書評である。筆者の展開する論点が的確に紹介されている。「等価交換」、「消費者化」といったやや難解な本書のなかの用語も、評者は正確に理解していることが、書評から良く伝わってくる。評者が本書の内容を字面ではなく深く読み取っていることがわかる。

「うまい」と思わせるのは、評者の文章力にもある。不正確な文章やぎこちない文章が見当たらない。流れるようにスムーズに読める文体である。来年以降の応募者も目標にして良いレベルの文章である。特に文末表現が単調な繰り返しになっていないところは、この書評のとても優れた点である。

さらに良くするために注文をつけるとすれば、この書評は鮮やかな紹介となっているものの、評者が本書の内容を読んで、どのように考えたのかという点が余り伝わってこない。

つまり、「紹介」としてはとても優れているが、「批評」の面で十分であるとはいえないのである。この点を改善すれば、さらに優れた書評となったことだろう。

とはいえ、本の内容理解、構成力、文章力など総合的に見て、最優秀賞にふさわしい書評である。

○優秀書評賞作品

田中 麻美（人文学部社会学科3年）

イギリスのいい子 日本のいい子

—自己主張とがまんの教育学—

〔請求記号：081/C2/1578〕

著者：佐藤淑子 出版者：中央公論新社

出版年：2001



将来自分が母親になった時、わが子がどのように育ってほしいと願うだろうか。相手の立場に立って物事を考えることのできる子になってほしいけれど、自分の意見が言えないようでは困るし、自分の主張が言える子になってほしいけれど、協調性がないようでは困る。子育てって難しそう…。幼児の同じ行動

が、わがままであると受け取られたり、正当な自己主張であると受け入れられたりすることがあるのであれば、わがままと自己主張の線引きは難しい。一体どこまでが自己主張で、どこからがわがまなのか。それは絶対的な価値によって判断されるものではなく、その国独自の文化や社会性、対人関係など相対的な価値によって判断されると筆者は述べている。日本とイギリスの文化比較を軸に、様々な実験や例を基にして幼児期の自己主張と自己抑制の発達を考察した一冊である。

本書ではまず、「自己主張=自分の欲求や意志を他人や集団の前で表現し、実現すること」「自己抑制=自己の欲求や行動を制すべき時に抑えること」と定義した上で、・自己主張が低く自己抑制が高い日本人・自己主張が高く自己抑制が低いアメリカ人・自己主張が高く自己抑制も高いイギリス人と単純に類型化している。なるほど、確かに日本人とアメリカ人においては容易に想像がつくし納得がいく。しかしイギリス人はどうであろうか。間接的表現を好むことが対人行動における抑制の高さを表していて、物静かではあるが主張は有無を言わせないほど強いというイギリス人の特性が、自己主張も強いが自己抑制も発達しているといわれる所以である。自己主張のアメリカか、自己抑制の日本かとされてきた従来の2分法を否定した点は本書の特徴だといえるだろう。

一般的に日本人の特徴は、協調性・情緒・他者への思いやりにみられ、イギリス人の特徴は、自発性・能動性・他者との距離・ルール遵守にみられる。これらは子供時代のしつけや教育に影響しているのではないかと筆者は考え、日本とイギリスの家庭教育、幼児教育機関などの特徴を比較して、自己主張と自己抑制の受容と規制について文化比較の視点から捉えている。また本書では、日本で伝統的に美德とされてきた「我慢」という対人行動のあり方が現代の日本人のスタイルには合わなくなっており、抑圧が続いた結果「キレる」現象に結びついているのではないかと指摘している。

子供のメッセージをわがままとしてではなく、自己主張として受容するためには、まず私たち大人が自己主張を捉え直し、かつ自己抑制も見失うことなくバランスをうまくとる生き方を構築していく必要がある。どこまでが自己主張でどこからがわがまなのか…。自己主張と自己抑制のバランスのとれたイギリス型の教育をヒントにして、現代の子供に合うしつけを模索していくことがこれからの課題となるだろう。親として、子供の成長を手助けする教育者として、是非一読を薦めたい一冊である。

○講 評 経済学部教授 渡邊 孝次

西洋と日本の文化を比較する内容である。これは僕の大好きな題材であり、テーマだけですでにこの作品を推す気になった。とはいえ、西洋と日本の比較というと、普通はアメリカと日本の比較で終わってしまいがちである。この本のテーマに即して言うところ、「自己主張のアメリカ vs. 主張しない日本」というステレオタイプで終わることが多い。ところがこの本の言いたいことは、「西洋」にも色々あって、イギリスとアメリカでは大きく異なるということである。こうなるとますます面白いが、評者の田中さんも、イギリスという第三の立場の導入に興味を示している。同じ西洋であるだけでなく、同じ英語を話す国でありながらこれだけ違いがある、ということに関心をもってくれたことだけでも、僕は田中さんに感謝の念すら抱いてしまう。

ということで、僕の中ではこの作品は「大もとの選択ですでに入賞！」という感じなのだが、惜しまれるわずかなミスを2つばかり指摘しておこう。まず、作品中に何度も「作者」の意味で「筆者」が使われている。だが、これは誤りである。自分で書くレポートなどで「筆者」とは、「自分」という意味にほかならないからである。ここでは、「筆者」ではなく「著者」が正しい用語であろう。また、最後の締めくくりとして「親として、子供の成長を手助けする教育者として、是非一読を薦めたい」とあるが、これは親や教育者になった者が言うセリフであり、田中さんには不相応である。「として」ではなく、「親や教育者<に>」とした方が正解であったと思う。

○佳作作品

合田 佳奈（人文学部社会学科2年）

人は見た目が9割 〔請求記号：Lib/2006〕

著者：竹内一郎 出版者：新潮社 出版年：2005

「人は見た目が9割！」勇気のある人はぜひ声に出して読んでみよう。

さて、初めてこのタイトルを目にしたとき、あなたはどんな印象を持っただろう。「見た目が9割なら自分は大丈夫！」と思っただろうか。いつぞやの先生の「人を見ただ目で判断してはいけません」という教えが脳裏をよぎっただろうか。ちなみに「そこまではっきり言わなくても……」と心の中でしょぼくれたのは私である。とはいってもここで述べられている「見た目」とは、何も容姿の美醜のことだけではない。しぐさ、色、におい、タイミング、距離間——それら言葉以外のものをひっくるめた上での「見た目」なのだ。本書によると人の能力や性格もここに入るといふ。そして驚くべきことに、人は他人とのコミュニケーションの際、顔の表情から55%、声の質や大きさ、テンポから38%、話す言葉の内容から7%の割合で情報を受け取っているというのだ。

本書では一例として可愛い女の子の定番について述べている。女の子はぎこちない感じ、隙のある雰囲気、男の子に好まれるという。なにより最大の特徴は、内側に向けた足。「私はあなたに従順ですよ」というメッセージがしぐさやポーズに含まれているというのだ。イメージがわからない人も、涙や潤んだ瞳が女性の武器であるという話を耳にしたことがあるだろう。某CMのチワワを思い浮かべればさらにわかりやすいかもしれない。このように、私たちは常に「見た目」から何かしらの情報を受け取っている。

つまり少々語りに自信がなくても、「見た目」を意識すればコミュニケーション能力は向上するということになる。本書のタイトルを見て私のように落ち込んだ人もどうだろう。悲観する必要はないことがわかるはずだ。

さきほども述べた通り、言葉が伝達する情報は1割にも満たない。あなたも早く本書に目を通してみるといいだろう。余裕があればこれまでの自分をふり返ったり、周りの人を観察したりするのも一興かもしれない。文字通り「百聞は一見にしかず」である。

高木 政利（人文学部社会学科3年）

日本の若者の弱点 〔請求記号：367.68/N89/1〕

著者：中里至正・松井洋 出版者：毎日新聞社 出版年：1999

私が読んだ「日本の若者の弱点」という本では、アメリカや中国、韓国、トルコなど6カ国の若者と比較した日本の若者の特徴、日本の若者の考え方・生き方の変遷、日本における親子関係の悪さ、そして日本の若者に見られる決定的な弱点について述べられている。

日本の若者は、先に述べた6カ国の若者と比較して、エロ本・ポルノ、異性と泊るといった性に関わる事に対して特に許容的で、親や先生などの大人との関係に断絶があり、価値観が自己中心的、非社会的、物質志向で、将来を考えない傾向があるという事が述べられていた。この事に対して、日本の若者にはここまでひどい傾向があるのかと正直驚いた。この本では、他の数カ国の若者に対して日本の若者がとても異常であるという事が強調されている様にも感じるが、いずれにせよ大きな問題であるといえるだろう。

89年から98年の間に、日本の中学生が犯罪に対してかなり甘くなったという事もこの本で述べられている。中学生は犯罪に甘い態度を持つようになり、いわば「危険」な存在になってしまい、このような事が「非行の低年齢化」という現代の非行の特徴に結びついていくのではないかと述べられているが、まず、中学生が「危険」な存在になったと述べるのは、中学生の存在自体を非難し、中学生と向き合う事を避けている様に思えてしまう。危険だと捉えるべきは中学生の存在ではなく犯罪に甘い態度を持つという行為そのものではないだろうか。また、現代の非行の特徴として「低年齢化」が挙げられているが、それはただテレビのニュースや新聞といったメディアの過熱報道によって非行が低年齢化しているという錯覚に陥っているだけであるという可能性も否定できず、はっきりと「非行の低年齢化」と特徴づけてしまうのは問題があるのであるという気がしてならない。

さらに、この本では、高校生、中学生、男子、女子という様に、若者各層についての問題についても述べられているが、ここで気になったのは、日本の男子にはチマチマとした「自分主義」という傾向がみられ、

日本の若い男子のイメージが「ストーカー」という姿であると述べられている点である。「ストーカー」というのは、社会にとって迷惑で危険な存在であり、いくら考え方や生き方の「弱さ」や「問題」がみられるからといって若い男性を「ストーカー」という姿として捉えるのは、余りにも行き過ぎであり、これでは日本の若い男性が不愉快に感じるだけではないだろうかという気がする。

この本を読んで、日本の若者がどのように問題なのかについて深く考えさせられた。私自身現在若者と言われる年代であるため、決して他人事と捉える事のできない身近な問題であり、自分自身の日常生活を改めて見直す上でもこの本の内容は意義深いものであると思う。ただし、内容全体を通して、日本の若者への非難が行き過ぎではないかと思える点も多く見受けられた。

立町 祐作（人文学部社会学科3年）

安心のファシズム ―支配されたがる人びと― 【請求記号：081/13/897】

著者：斎藤貴男 出版者：岩波書店 出版年：2004

携帯電話からクレジットカードまで、人びとは便利さと引き替えにプライバシーを少しずつ公開せざるを得ず、いまはそのような社会だと納得させられてきた節があるような気がする。しかし現実には年金情報、銀行、庶民金融、証券会社、プロバイダーから何百万人も情報が次々と漏洩し、それがその先どう使われているかは全く明らかにされていない。

情報は個々バラバラでは利用価値は低いが、統合されることで情報保持者は人びとの人権を冒すことが可能になり、人びとを強くコントロール出来る社会が密かに出来上がってしまう。人びとはそのことを強く意識することなく（あるいはしたくなく）、安心と引き替えならプライバシーなどいらない、「自由のない幸せ」などと言い出す人びとも現れている。

著者は多方面の取材や調査から、この現実を暴き出し、訴えている。独裁者だけの力でファシズムは成立するのではなく、利便性の裏に潜む自由の放棄と隷属を受け入れる心性こそが問題だと、激しく警告しようとしている。日本をある方向へ引っ張って行こうとする動きについて、的確に指摘している。

問題は、その動きというものが、必ずしも権力者、独裁者の手による強制的なものであるとは限らない、ということなのだと思う。大衆もまた、長い物に巻かれることを快く思い、その流れに簡単に乗っかっていく性質があるのだということを明らかにし、事実今そうになっているのではないかと叫ぶ。

はたして、その叫びは誰かの心にブレーキをかけることができるだろうか。

日常のなにげない視野の中に、実は恐ろしいものが隠されている。そういうことを暴く著者は、とくに論理的に構築されたわけではない仕方で、次々と日常の危険性を指摘している。自動改札の風景から、監視カメラや携帯電話などには、私たちの安心の心理を巧みに利用する、ファシズムの悪魔が潜んでいるのではないか。

現実の政治に関わる人々の中に、どんな巧みでそれを助長する発言が潜んでいるかを、洗い出して整理していることも、この本の特長である。その時期問題になって騒がれたとしても、その場だけで通り過ぎてしまう、失言の数々。それを集めて並べていけば、ある方向へ日本が傾いていることを、歴然と証明する。この働きは、ありふれたようで、あまりなされていないことではないか。

かつてイタリアで、あるいはドイツで猛威を奮ったファシズムの嵐。あれとは違う、と安心しきっていることこそ怖いと思う。歴史はまったく同じ姿では再び現れない。定義はしにくいファシズムであるが、今どのような形で襲ってこようとしているのか、著者は日本の姿に焦点を当てつつ、それを明らかにしている。

この本を読んでも何にも感じない、そういう社会メンバーこそ、すでにファシズムに体よく利用されており、しかも自らそのファシズムに協力加担している、加害者になっている存在なのだ。

向井 梨菜（人文学部社会学科1年）

最後に咲く花 【請求記号：Lib/2005】

著者：片山恭一 出版者：小学館 出版年：2005

一手を取ってみた。握り返す力はなかった。あまり強く握ると、彼女そのものが壊れてしまいそうだった。―

「生」と「死」はいつも隣合わせで、どちらも引き離すことはできない。そうわかっているながらも、身近な人間に対しては「死」に対して否定的になりがちだ。「死ぬ」という現実や事実、考えることさえも拒否してしまう。主人公の「永江くん」は、「由希」に対して「死」を拒んできた。彼の中で、「由希」が生きていな

い、という世界に自分が生きていることが想像できなかったのかもしれない。

大切な人が不治の病に侵され、「死」を見届けるまでの間、人は何を考え、何をするだろう。

変わることもない現実で自分の無力さを実感し、絶望の中を彷徨っている間にも、時間は過ぎていく。支えるはずの自分は、支えられるはずの大切な人に、支えられていると気づく。大切な人が、もっと大切なことに気づく。自分が無力だと感じながらも、残されている時間を一緒に過ごしたい。それが自己満足であったとしても、傍にいたい、と思うことは、互いに「生きている」ということを実感できる最高の方法ではないか、と思う。「由希」が感じるように、生きているという現実よりも、生きているという実感が、生きているという価値が大切であると思う。

過ぎていく毎日が、もったいないと思える本であった。自分のことも大事にしながらも、心の真ん中には自分ではない誰かがいることを、とても羨ましく思った。

この本を読み終えて、「死」の向こう側にも世界はあって、「死」が終わりではないと思えるような、広い気持ちが持てたと思う。そして、自分がいなくなると、誰かに寂しいと思われるより、大切な人がいなくなると、自分が寂しいと思う、これからを過ごしたい。

この本は、「生」と「死」が隣合わせで、その中で生きる人間を窮屈にさせない、むしろ、自分が思っているよりも、自分が生活する世界が広いと感じる本である。

森 友樹（経営学部経営学科4年）

強く生きるために〔請求記号：Lib/2006〕

著者：美輪明宏 出版者：主婦と生活社 出版年：2000

人とは、弱い生き物である。自分が正しく、周りの人間が間違っている、と思い込むことで自分を守っている。弱さを隠すこと、自分を肯定すること、相手を否定することで自分を支えている人間はこのほか多いのだ。この本の著者、美輪明宏氏によれば、人間界には魔界から来た「魔界人」というものが存在し、それは人々を地獄に陥れるために周到な罠を容易し、なにくわめ顔で、私たちを騙すために日々機会を伺っているのだという。そのような悪魔の声に耳を貸すことなく、まっとうに生きることが徳の高い人間になるために必要なことなのだ。さらに著者曰く、この世の中は「正負の法則」というもので成り立っている、と論じている。いい事があればその分相反して悪いこともおこる、ということである。例を挙げれば、仮に金持ちの裕福な人間でも、そのお金を得るために随分汚いことをしてきたのかも知れないし、家族、親族間での遺産問題等々でギスギスした人間関係である可能性も否めない。周囲からは妬まれ、非難的になることも少なくない。人気のある芸能人がその人気ゆえにプライベートでは気の休まる暇も無かったり、仕事に追われてろくに睡眠も取れないような厳しい生活を送っていたりするのである。徳の高い人間になるために、と言えば多少言葉が重過ぎるかも知れないが、良い人生を送るためにどのように生きればいいのか、そのヒントがこの本にはある。

「恋愛」という言葉がある。著者によれば、相手にあれをして欲しい、これをして欲しい、と相手に何かを求める欲求願望といえる感情が恋であり、相手に何かをしてあげたいという、自分の何かを犠牲にしてでも相手に与えてあげたい、という自己犠牲の感情を愛というのだそうだ。相手に何もかもしてほしい、与えて欲しい、と言っているうちは、その人はただ自分の欲求を満たしたいだけであって、それは恋愛と呼べるものではない。相手に自分のことを理解してほしい、わかって欲しいと思う前に、相手のことを自分が分かろうとすること、相手を慈しむこと、それが愛というものなのだ、と経験豊富な著者はそう語るのだ。

厳しいからこそ、優しい。著者にはこのような言葉が似合う。著者はこの本の中で多くの悩み相談に答えている。その中には、投稿者に対して、辛辣な意見を述べることも少なくない。だが、おそらく厳しい言葉をいってくれる人間が、その投稿者の周りにはいなかったのだと思うほど、著者の言葉は第三者である私の心にも響くものであった。この人になら、何を言われても納得できる。それだけの経験を著者はしているのだ。読後に、これほどの説得力を持った本を書くことの出来る著者の人生に興味を抱いたことはいうまでもない。そう言わしめる程、この本には力がある。まさにタイトル通り、強く生きるために必要な力が、この本には確かに込められているのだ。

※ 過去作品・講評は松山大学図書館ホームページに掲載しています。
 (<http://www.matsuyama-u.ac.jp/lib/syohyo/syohyo01.htm>)

図書館News

図書館1F リニューアル !!

2008(平成20)年4月より図書館1Fが変わります!

利用者のことを第一に考えてさらに使いやすく、また多くの人が行き交う図書館を目指し、以下のコーナーをリニューアルしました。みなさんぜひ一度お立ち寄り下さい。



「第8回 松山大学図書館書評賞」募集 !!

松山大学図書館は、以下の要領で学生のみなさんから書評を募集しています。

1. 応募資格：本学学生（松山大学および松山短期大学学生）、ただし大学院生は除く。
2. 書評対象図書：本学図書館所蔵の図書であること。
3. 応募要領：
 - ①図書1冊につき800字以上1200字以内とする（ただし、未発表のもの）。
 - ②原則として、ワードまたはテキスト・ファイルで作成し、原稿と記憶媒体（フロッピーディスクやCD-R等）を提出すること。
 - ③応募件数は、2篇以上も可（但し、受賞は一人1篇とする）。
 - ④応募後の書評の使用権は、本学に帰属する。
4. 表彰：

①最優秀書評賞……1篇	表彰状及び副賞（図書カード1万円）
②優秀書評賞……2篇	表彰状及び副賞（図書カード5千円）
③佳作……5篇	表彰状及び副賞（図書カード3千円）
5. 審査：図書館運営委員会
6. 書評について：読書感想文ではなく、書評＝「書物の内容を批評・紹介すること」であること。
7. その他：応募締切、入選発表および表彰式の日程は新年度、松山大学ホームページの図書館ページに掲載します。

以上

私が薦めるこの一冊

人文学部教授 穴田 浩一

『字幕屋は銀幕の片隅で 日本語が変だと叫ぶ』



太田 直子著
(株)光文社（光文社新書）
2007年2月（初版）

請求記号：801.7/Oo
配架場所：図書館開架

一秒あたり4文字、一行10文字で二行以内。何のことかお分かりだろうか？これを聞いてピンと来た人は相当な映画通である。日本で公開される外国映画の多くは、原語の台詞が翻訳され日本語字幕として画面に現れる。俳優の動きに合わせて、しかも場面の切り替わりの激しい銀幕の中で、人の目が追うことのできる限界が上記の文字数なのだそう。「人間が文章を読むスピードは限られているので、その能力に合った文章量にしないと、読み終わる前に字幕は消えて、話しがまるで分からなくなってしまう」との経験則にもとづいて設定されたのが冒頭の字数制限の由。本書からその妙技の具体例を二つほどあげてみよう。（左がもとの台詞で、右が本書の著者のつけた日本語字幕）

おい、こんなときに、どこへ行ってたんだ？

→ どこへ行ってた？

なぜもっと前にそれを言わなかったんだ？

→ なぜ黙ってた？

下の例など、筆者には、お見事と映るのだが如何だろう。よって、本書の中で頻繁に強調されるのが、「映画の字幕翻訳は、本などの普通の翻訳とは大きく違う」という点と「言うなれば字幕は、『要約翻訳』なのである」の二点である。

外国映画を見るにあたって、どんなにその外国語の達人であってもネイティブでない限り、多かれ少なかれお世話になるのが翻訳字幕である。以前、「字幕なしで映画が見れるようになります」なんていうキャッチ・コピー付きの英語教材だったか、駅前留学だったかがあった。「見られる」だろう！と突っ込みを入れたくなる衝動は抑えるとしても、そんなのあり得ない話しである。少な

くとも、筆者はそう信じてやまない。というのも、何語であろうと、隠語、卑語、造語、略語、新語の類は無限大に生み出され、今を映し出す映画ほど、それが入り込む余地は大きい。たとえネイティブであっても、対象となる世界・業界に精通していなければ、セリフを100%完璧に理解できないということも起こり得るはずだ。ましてや、ネイティブではない者にとって、その外国語を何年専門にやったところで字幕にお世話になっても何ら不思議はない。ことほどさように、字幕は大切なのである。この本はそれを再認識させてくれる。

しかし、本書は映画字幕翻訳の単なるハウ・ツウ物でもなければ、あるいは筆者のようなマニア向けの業界裏話の暴露本、紹介本でもない。字幕制作を通して見た今の生きた日本語のブレと揺れについて、さらには現代日本人の教養のレベルについてまで踏み込んでいる。なかなか奥が深い。例えば、接頭語の「お」や接尾語の「さん」、さらには「させていただく」などの過剰敬語の問題を取り上げ、これが一字二字にこだわる字幕翻訳にどれだけの影響を及ぼしているのかを淡々と、しかして切々とうたっている点が特に興味を引く。また、シェイクスピア劇を現代ふうに変換した映画を見た青年たちの「ところでさあ、シェイクスピアってだれだっけ？」ということばに、逆の意味での教養の壁を感じている。曰く、「世間の『教養ジリ貧』に積極的に荷担しているようで悩ましいのだが、観客は映画館に映画を見に来ているのであって、字幕を読みに来ているわけではない」と。かようなプロ意識を持ったうえで、如何に観客が分かる日本語を使うか、選び出すか、如何に観客が話しの筋をちゃんと理解できるような内容の字幕にするかを、冒頭に上げた字数制限の枠の中で悪戦苦闘するさまが手に取るように分かる。

してみると、筆者には気になってしょうがない昨今の「ら抜き」ことばは、一文字の増減に神経を使う字幕屋にとっては歓迎すべき慣行なのだろうか。通勤で利用する市内線の車中で、信号停車のたびに耳にするのが「信号のお待ち合わせをお願いします」。黒板の片隅で「変だっ！」と叫びたくなる衝動を抑える毎日である。

『5万年前—このとき人類の 壮大な旅が始まった』

(原題 Before the Dawn: Recovering the Lost History
of Our Ancestors)



ニコラス・ウェイド著
安田 喜憲【監修】
沼尻由起子【訳】
イースト・プレス
2007

請求記号：469.2/wa
配架場所：図書館閉架

あなたの祖先は5万年前、アフリカ大陸を脱出した150人余りの集団の中にいた——ヒトゲノムの解明により、近年では、いわゆるアフリカ単一起源説が有力視されている。この説によると、人種に関係なく私たち全てに共通した直接の祖先である現生人類の一群（著者によれば、僅か150人程の集団）は、ある時、しかもその一回限り、住み慣れたアフリカの大地をあとに世界各地へ「壮大な旅」に出た。約5万年前のことである。

原著は、二大科学誌『ネイチャー』、『サイエンス』の記者を経、『ニューヨーク・タイムズ』で編集委員として科学欄を担当している人気科学記者ニコラス・ウェイド氏の手によるアメリカのベストセラーだ。進化学、霊長類学、人類学、言語学、行動科学、考古学、社会学などの分野に亘って多くの著名な研究者に取材を行い、各分野で注目の学説を紡ぎ合わせることで、新しい人類史の可能性を示している。「科学物はどうも…」と思うかもしれないが、本書は一般向けで、とても読み易く、また、刺激的な内容で溢れている。

本書の内容を紹介すると、まず、人類がチンパンジーなどの類人猿から分かれた時期を500万年以上前とした上で、人類と類人猿の間に断絶はなかったと説く。両者の行動様式はよく似ており、人類も残虐な闘争や縄張り行動を取っていた。が、やがて、両者は互いに別の道を歩み出す。人類の進化の原動力は血縁によらない社会的結束だ。それを可能にしたのは他ならぬ言語である。現生人類とチンパンジーではゲノムレベルで1%しか違

わないが、この1%の中に言語に関わる決定的な情報が含まれていると考えられそうだ。因みに、言語に結びつく可能性があると言われているのはFOXP2と命名されている遺伝子である。言語によるコミュニケーションも含め、人類の行動の進化は身体的進化に依存した。言語については、より重要な進化が脳に起こり、この結果、現生人類だけが言語を獲得し得たのだ。出アフリカ以前の出来事である。現在、世界に約6000の言語（日本語、英語、中国語、etc.）が存在するが、アフリカ単一起源説が正しいなら、かつて言語は1つしか無く、そこから6000余の言語が徐々に派生していったことになる。先に出アフリカを果たしたネアンデルタール人に私たちの祖先が取って代わることができたのも言語のお陰だ。このような交代劇の後、現在各人種に見られる皮膚の色の発現（現生人類は元々、皆、黒い皮膚をしていた）や、モンゴロイドの登場、人類初のアメリカ大陸への移住、人類の友である犬の誕生など、現生人類に関する有史以前の出来事のほとんどが、約2万年前の最後の氷河時代に起こった。そして、人類の進化は今もなお続いている。文字による記録や遺物のような史料では人類史を辿るのに限界がある。ヒトゲノムはそれを補うことができる。そればかりか、最近のことまで——謎とされるユダヤ人の歴史や、第3代アメリカ大統領トマス・ジェファソンの一族の秘密までも——詳細に記録しているのである。

他にも、現生人類が過去に有した食人の風習とBSEとの因果関係や、人類が衣服を纏い出した時期がシラミのゲノムから割り出せるなど、興味深い話題は尽きない。

かつて、言語の起源と言えば、科学とは程遠い珍説ばかりで、言語の起源を論ずること自体、言語学ではご法度とされた。今や、それも真面目なテーマとして研究できる環境が整いつつある。言語の起源だけでなく、「私たちはどこからやって来たのか、私たちは何者なのか、私たちはどこへ向かっているのか」といった（ポール・ゴーガンの絵の題名としても有名なが…）人類の謎に本書はヒントを与えてくれそうだ。

— 統計データで見る松山大学図書館 —

図書館利用状況推移表

※ 貸出冊数は研究室分を除く

年 度	入館者数	貸出総冊数	貸 出 冊 数 （ 学 部 別 ）						学 生 数
			経 済	経 営	人文英語	人文社会	法	薬	
2003年度	216,074	54,429	9,928	10,776	4,882	7,374	6,075	—	5,997
2004年度	203,977	44,321	7,248	9,418	4,848	5,696	4,884	—	5,730
2005年度	182,911	41,132	6,731	8,010	4,783	5,773	3,619	—	5,459
2006年度	168,705	37,526	5,717	6,767	4,346	5,502	3,191	782	5,460
2007年度	182,649	39,790	5,485	7,936	5,271	6,067	3,871	1,235	5,816

※ 学生数は2007.10.1現在

※ 2007年度は4～1月の数字

『相互協力』利用件数推移表

※ 1999年9月よりNACSIS-ILLを開始した

	本学からの申し込み件数			他館からの受付件数			合 計
	文献複写	相互貸借	所蔵調査	文献複写	相互貸借	所蔵調査	
2003年度	589 (99)	312 (63)	16	723 (73)	52 (23)	8	1,700
2004年度	419 (61)	146 (6)	6	1,323 (156)	98 (26)	11	2,003
2005年度	409 (35)	232 (26)	0	1,327 (113)	111 (32)	8	2,087
2006年度	332 (45)	331 (40)	4	1,590 (91)	164 (29)	7	2,417
2007年度	395 (24)	255 (40)	0	1,416 (95)	117 (38)	6	2,183

※ () 内は申込がキャンセルの件数、受付が謝絶の件数

※ 2007年度は4～1月の数字

「学生が利用しやすい図書館を目指して」

松山大学図書館では、2008年度から学生支援策の一步として、新入生等に図書館を上手に利用してもらうことを目的とし、上級生の皆さんの知識と技能を無償でご提供いただける方の協力をお願いしたいと思っております。支援活動を通して、学生の皆さんとの相互理解を深め、連携と協力により、「学生が利用しやすい図書館」を一緒に作っていきませんか？詳細は図書館カウンターにてお問い合わせ下さい。

「編集後記」

人との出会いで人生が変わることがあるならば、本との出会いで人生が変わることもあると思います。今回は書評賞の特集でしたが、書評を書くということは自分の能力を高めるだけではなく、どこかの誰かに人生を変えるくらいの出会いを提供できるかもしれません。これは非常に素晴らしいことではないでしょうか。まずは松山大学図書館ホームページ上に掲載されている過去の作品をご覧ください。

松山大学図書館報 No.41 2008年4月1日発行

編集・発行 松山大学図書館

〒790-8578 松山市文京町4番地2 TEL (089) 925-7111(代)

ホームページアドレス <http://www.matsuyama-u.ac.jp>

E-mail : mu-libs@matsuyama-u.jp